

18 東大医学部生化学教室創設者隈川宗雄とその一族

中山 沃

東大医学部生化学教室の創設者隈川宗雄（一八五八一—一九一八）は重患の東京帝国大学医科大学長青山胤通にかわって大正六年（一九一七）九月その後任となったが、翌年四月七日胆嚢癌で死去した。この事を解剖学教授小金已良精は日記に、「十時教室、ただちに隈川氏を見舞う、あと一、二時間という予想なり、そのことをたづ（良精の長女、生化学助教教授柿内三郎の夫人）へ電話す、五時半ごろいよいよ危篤のしらせあり、病室に至る、六時こときれたり、またまた良友を失う、感慨ふかし、山川総長、片山氏もそばにあり、これより相談、自分葬儀委員長たることを承知したり（星新一『祖父小金井良精の記』）」と記している。これ以外の隈川宗雄に関する記載は死亡当時の医学雑誌や日本生化学会会報（五巻一・二号合併号）の隈

川先生記念号に詳しいが、これらを参考にし、演者の調査し新たに判明した宗雄はじめ一族に関する資料を紹介したい。隈川宗雄の孫の渡辺宗孝氏が私の中学校以来の友人であることから、資料や教示をえた。

宗雄は福島藩板倉侯の藩医原有鄰の次男で、旧幕府海軍軍医隈川宗悦（一八三八—一九〇二）の養子となり、明治八年（二八七五）東大医学部予科に入學、同十六年卒業、十七年ベルリン大学に私費留學、五年間生理、病理化学を研究、二四年医科大学教授、二六年九月医化学講座担当、三〇年三月医化学教室が生理学教室より分離独立し、同教室主任を命ぜられた。先進国に先立ち大学の独立学科として講義、実習が開始されたことは画期的なことであり、隈川の功績である。孫の宗孝氏は宗雄がドイツから購入して帰った素晴らしいライツの顕微鏡と黒田清輝の描いた宗雄の肖像画を所蔵している。

宗雄の養父宗悦は幕臣高橋彦三郎の三男、岩代伊達郡富田村の生まれ。二本松藩医服部恭庵に医術を学び、ついで万延元年江戸西洋医学所に入り、傍ら福沢諭吉、石井信義、高橋順益らについて蘭英学書の講義を受けた。

一方では浅田宗伯の信任をえて、宗悦の名を授けられた。文久三年江川太郎左衛門の家臣となり、幕府軍艦の乗組医師を経て、慶応三年幕府海軍医となり、海軍所の浜御殿内に病院（海軍養生所）を新築し、その所長となった。明治二年、横浜へ再来日した米人医師シモンズに従い新医術を学んだ後、同三年上京し開業の傍ら米人医師ヨハンズに学び、彼らの影響を受け、同年九月同志金沢良齋・土屋三隆・山本甫文・田村俊齋・吉邨況・藤野玄洋（横浜）・池田玄岱らと求新社を組織した。「求新社之記」の中で宗悦は「当今外国ノ交際日ニ盛ニ趣キ人モ日ニ知識ニ進メバ故ニ医ノ術モ大ニ開ケタレバ此ニ於テコソ旧弊ヲ一洗セザル可カラズ——予近頃業ヲ洋ニ受ケ其云フ所ヲ聞クニ皆貴重ノ論ナリ、是ニ於テ昔日ノ非ヲ知り悉ク之ヲ改ム——」と記し、完全に漢方から脱却した。また求新社薬局規則を定め、洋式の薬剤投与法、診察料や薬価の支払い方法を定め、一方貧困者には支払いを免除し、病家における酒食のもてなしを禁じた。同八年師シモンズを患者診察、医学講習教師に招き、かつ銀座尾張町に眼科医院を開設し、ついで有楽町に共立病院を設立

した。同十四年高木兼寛・戸塚文海・松山棟庵らと共に芝に施療病院である有志共立東京病院（現東京慈恵会医科大学の前身）を開設し、その診療に従事した。品川の曹洞宗海晏寺の隈川家の墓域には成医会から献ぜられた一対の灯籠がある。石井信義と親交のあったことは石井の明治七年の日記から察せられる。

隈川宗雄に子供は無く、弟子の高木八郎（岐阜県出身、東大卒）を養子とし、妻は新潟県関川村の豪農渡辺三左衛門の長女初樹（ハツキ）で、その長男が宗孝（東大生物学科卒、岡山大学名誉教授）である。

（西宮市）